「国際化は、国際社会の道理尊重が前提では……」へのコメント

当 HP「国際化は、国際社会の道理尊重が前提では……（「雑学」バックナンバー「随想等関係（Ⅳ）」Ｐ．2005.　8.18.：参照）」の記事を目にしてくれたメル友から、次のような情報とコメント（１Ｐ～２Ｐ）をいただいた。

この機会に私も色々考えてみたことを返信（２Ｐ～５Ｐ）した。

また、このファイルを目にした若者からのコメント（６Ｐ～）も掲載しました。

みなさん自身もこの機会に考える何かの資料になればと思い、併せて紹介します。

（2005 年 8 月 30 日　記）

メル友のコメント。

【　現在、日本で国際問題として大きなトピックスになっているものは、北朝鮮問題、靖国問題、領土問題かと思います。北朝鮮問題は戦後のことですので、この「国際社会の道理」とは、別に考えなければならない問題かと思います。

この「国際社会の道理」の基となっているものは、ポツダム宣言かと思います。

ポツダム宣言では、以下のことが骨子になっていると言うことです（フリー百科事典「ウィキペディア」より）。

a..　日本国軍（注：政府ではない）の無条件降伏、及び日本国政府によるその保障（十三条）

a.. 領土を本州、北海道、九州、四国及び諸小島に限定（八条）

a.. 戦争犯罪人の処罰（十条）

a.. 日本を世界征服へと導いた勢力の除去（六条）

a.. 日本軍は朝鮮半島および台湾から直ちに撤退する

靖国問題で大きな波紋を投げかけているのは、A 級戦犯が奉られていることだと思います。このことは上記の通り、ポツダム宣言にて処罰規定を設けていますので、「勝手な裁判」という論調は通らないと思います。

別な問題として、何故政治家が靖国を訪れるかが問題になると思います。

靖国にはご存知のように A 級戦犯と一般戦没者が奉られています。

一般戦没者は、「戦争」という悲劇が生んだ、被害者であると思います。この方々のために参拝するのであれば、私は政教分離とはいえ、日本の過去に対する国民への謝罪の一環として許せる範囲ではないかと考えています。

しかし、東アジアの国々が、靖国を批判しているのは、A 級戦犯が奉られているからだ

と考えます。このお気持ちも、理解できます。
　この点を政治家がどう考え、どのような考えで参拝するのかが知りたい所です。マスコミは「どのようなお立場で参拝されるのですか？」と、よく政治家に尋ねますが、そんなことはどうでもいいことだと思います。
　それよりも、参拝する政治家の参拝理由を正確に尋ね、報道していただきたいと思います。

　領土問題はポツダム宣言の不備によるものではないかと考えています。
　ポツダム宣言時に明確な領土の線引きが出来ていれば、中国、ロシア、韓国との島をめぐった争いはなかったことは自明のことです。
　この島をめぐる問題は、ポツダム宣言以前の条約等が効力を持っているかどうかの問題です。
　ですから、この問題は「国際社会の道理」の混乱から生じていると考えます。

　自己主張だけでは国家間の関係は深まらない。その通りだと思います。
　しかし、他国が感情論で自己主張をしてしまっている以上、この感情論を修復するのは、事実上、難しい問題をはらんでいます。
　感情論に、感情論をぶつけるという、子どものような事は好きではありません。
　対話をしようにも、相手が感情論ですから、会談はそれをなだめるので精一杯でしょう。各国の文化、思想の違いもありますし。
　各国間の利害関係を調整するのが、各国の政治家の努めだと考えます。
　しかし、どの国の政治家も、自国での自己保身のためにしか政治を行っていない気がします。
　もっと各国政治家がグローバルに世界を見渡せる力を身につけ、実践してもらわなければ、真の「国際社会の道理」は机上の空論になってしまう気がします。　】

私の返信。
【　色々と情報、コメントをありがとう。
　こうして色々とまた知ることが出来るから、発信は面白く、楽しくて止められない。
　「もっと調べてから発信を」と云われるかもしれないが、どこまで調べてから発信すればいいか迷う。
　「取り敢えず発信して、関連したことを教えて貰う方がトク！」というのが、自分の学

習意欲（？）と学習姿勢（？）

> 靖国問題で大きな波紋を投げかけているのは、＜

「各国政治家がグローバルに世界を見渡せる力を身につける」前に、まず「自らが見渡せる力」を身につけるように努力中。

あなたのいうように東京裁判で戦争責任者としたＡ級戦犯を合祀する靖国神社に、日本国を代表する総理が参拝することを、諸外国、特に日本帝国軍により被害を被った国々が問題にしていると思います。

「死者に鞭打つことはない。死者はみな同じ。」という日本特有の感情論は、国際社会の道理の前では通用しないと思います。

総理たる立場の人は私的感情論でなく、国際社会の道理の中で行動する日本国の総理として思慮すべきこと。

この辺の日本人の「私的感情」と、「国際社会の道理」を混乱しない論議をしないと、国際社会の中で生きて行くための建設的なことは生まれてこないと思います。

また、被害者や遺族の感情は、永遠に償われることはありません。戦争責任と同列に論じるのは間違っているかも知れませんが、国内の大きな事故（航空機事故、列車事故、船舶事故、等）でも、いくら示談・裁判等で損害賠償問題が片づいても、責任の所在が曖昧だと遺族等は納得しませんし、いつまでも自分たちの受けた理不尽な被害の原因、訳を追及しようとします。

また、戦争犯罪の痕跡を残そうとします。これは、大きな事故を風化させないために痕跡を保存し、記念碑等を建立しようとすることと、人間の心情論的には同じと思います。

そうした気持ちが、二度と同じ事故を振り返さないことを願うように、戦争に関しても反戦への動きに繋がっていると思います。

ですから、戦争責任や謝罪の姿勢さえも曖昧にする日本国（総理の靖国神社参拝問題、歴史教科書等）としての動きには周辺国、国民は敏感なのだと思います。

被害にあった国の人々の気持ちを癒し続けよう、謝罪し続けようとする姿勢が、国に要求されるのだと思います。

現に同じ敗戦国でもドイツは、今も国家として戦争犯罪人を追求しているし、個人の補償にも取り組んでいるとか。

アメリカ国は、日系人を隔離・収容したことは誤りだったことを認め謝罪しました。

こうした国の姿勢が、国（政府）と個人の、また国と国の信頼関係に繋がると思います。

相手国の被害者の感情に配慮することも、国際社会に生きる国家としてこれから益々国際社会で問われることと思います。

これからはどの国もこうした観点からの国作りをしていかないと、テロは永遠に続くと思います。

> しかし、他国が感情論で自己主張をしてしまっている以上、この感情論を修復するのは、事実上、難しい問題をはらんでいます。各国の文化、思想の違いもありますし。

もっと各国政治家がグローバルに世界を見渡せる力を身につけ、実践してもらわなければ、＜

「人類史上かってない共通の難題に苦悩しながらも連携して挑まなくてはならない。そのことへの国際感覚からの冷静な、建設的な、新たな見識、論調を識者やマスコミに期待したい。」と記したのはその意味で、あなたの云わんとする問題点を越えて行く思考を訴えたいのがねらいでの記事でした。

「各国の文化、思想の違い」を乗り越える新たな「世界観の哲学」が今最も求められるのでないでしょうか。

何でも簡単・明瞭に考えたい私に言わせれば何のことはない、ユダヤ人とか、日本人とかいうのは、国籍を持つという、その人の一つの属性。

属性云々以前に、我々人類は、「地球号の住人」ということでは共通、共有の存在。

「国際社会の道理」以前に、「地球号の道理（自然の摂理）」があるような気がします。

「グローバルに世界を見渡せる力」以前に、「グローバルに宇宙を見渡せる力」が必要かもね。

こうした観点は、障害児・者問題についても同じ。障害がある、なし以前に、お互い一人、一人の人間であるということ。

> 真の「国際社会の道理」は机上の空論になってしまう気がします。＜

空論にしないために、どこを根拠に考えるかとなると、国際社会の道理の再確認から出発するしかないと思っています。

> 一般戦没者は、「戦争」という悲劇が生んだ、被害者であると思います。＜

日本も人類史上初めての原爆により一般戦没者を始め空襲等で、多くの一般戦没者を出しました。アメリカでは日系人が隔離収容もされました。

つまり、一般人レベルからすれば、東アジア、東南アジアへの加害国である日本も、連合国による被害国にもなります。

ですから私は記事のように「国家という名による暴力行為そのものである戦争を、どんなに理由や意味づけをしようが、また『正義の戦争』とか『聖戦』と名をつけようが、一

般人が理不尽な被害を受けない戦争などあり得ない。」と思うのです。

「暴力」とは正に、相手の存在、人権を無視し、力ずくで抑圧し、被害を与え、時に死にいたらしめることですものね。

その暴力の最たる行為となる戦争を、絶対になくす努力が今の世界の人々に課せられていると思います。

戦争をしない国家にするには、そうした国の指導者を選ぶのは国民一人一人であり、そうした国民の意思で選べる国家体制（民主主義）が必要となり、それを維持し、守る一人一人の国民の意識が問われることにもなります。

私は、自由とは自分の好き勝手をいい、好き勝手な行動をすることでなく、究極の自由とは、今いる国家に対して「ノー」といえるかどうかだと思います。「ノー」と云えることを保障してくれる国家であって欲しいです。そのシステムが民主主義体制であり、選挙で国の指導者を選ぶことだと思います。つまり、自由とは、自分たちの国家を作るという責任を伴うものと思っています。

戦争犯罪に関わった人は罪を問われると、国家の、上官の命令に従ったまでと言い訳にしたことは我々のよく知るところですが、だからといって被害者の人権、尊厳への罪が免れる訳ではなく、それ故に裁かれたものと思います。

つまり、国家と自分の関係以前に、相手の人間と自分の関係が究極的には問われることだと思います。また、自分がいわゆる人間性を維持し続けることの国家かどうかを選ぶのは、自分自身の意思であるということだと思います。

これほどまでに、自分の自由には自分で責任を持たなくてはならないことと思います。

悲惨な戦争という歴史は、自分を含めた一人の人間の尊厳、人権尊重のあるべき姿を基として、国家と個人の関係をも我々に語りかけているのではないでしょうか。

今、国家の名において人権侵害の行われている国は、世界の国々から非難されていることからも、如何に人間の尊厳、人権尊重が国のあり方を問う基であることは容易に理解できることと思います。

このことは何も戦争に限らず、事件の時によく耳にする「組織のためだった」とか「上司の命に従ったまで」という言い訳にも通じる問題だと思います。

私自身が自己中心的・私的感情論に酔ってしまって周りの意見に耳を傾けなくならないように、これからも、他のことでも色々情報をくださり、また、コメント等もお聞かせてください。　】

若者からのコメント

①おはようございます。先生の HP 拝見させていただきました。

最近は今週末から始まる教育実習に向けての準備が忙しく、なかなかパソコンも見れませんでしたが、先生の戦争に関するコラムに共感させられました。

私自身、実習で国語「ヒロシマのうた」を担当することになり、ちょうど、それについてよく考えていた時期だったもので。

私も、これが現実に通用するかどうかは分かりませんが、子どもや未だに世界で存在する価値が曖昧にされている重度重複障害者といった社会的弱者に最優先に目が向けられたとき、戦争という命があまりにも軽く扱われることはなくなるのではないかと思います。

なぜなら、大人や社会的に優位な立場に立っているものの身勝手な判断によって決められた戦争で真っ先に矛先が向けられるのはそういった子どもや障害者なのだから。

終戦後 60 年たった日本において、戦争は「かつて」の出来事でしかないのかもしれません。

でも、世界に目を向けたら「かつて」の日本の状況が「今」のところもあるでしょう。

それを忘れてはいけないと思うんです。

戦争を知らない時代に生まれた大人である私たちが、次の世代を生きる子どもたちに伝えられることは限られているかもしれません。

しかし、それでもその範囲内で精一杯できることを実践できたらきっとこれからも語り継がれるように思います。（あくまでも願望でしかないかもしれませんが）

私はそれを、教育実習を通し、少しでもできたらいいなと思いますし、その後の〇〇施設実習で、社会的弱者に目を向ける意義、その大切さを肌で感じ、再確認できたらいいなと思っています。

最後に私が昨日、図書館から借りてきた絵本「おにいちゃん、しんじゃった」（絵をイラクの子が、詩を谷川俊太郎が書いたもの）の一部を引用します。

『　くり返すことができる
　　あやまちをくり返すことができる

　　くり返すことができる

後悔をくり返すことができる
だが　くり返すことはできない
人の命をくり返すことはできない

けれどくり返さねばならない
人の命は大事だとくり返さねばならない
命はくり返せないとくり返さねばならない

私たちはくり返すことができる
他人の死なら

私たちはくり返すことはできない
自分の死を　』

②今年の終戦記念日には，戦争と平和について考えようと，研究の方は少しだけお休みして「はだしのゲン」全巻をはじめ，靖国問題，朝鮮の歴史に関する本などを読み漁り，戦争に関する番組もいくつか見ながら考えていました．

あらためて自分の知識があいまいであったり知らないことが多いことを実感させられ，唖然とする一方，こうした過去の歴史を自分の生き方と対話していくことを考えさせられました．

国際化については，小学校から英語教育なんかするより，自分の国の歴史について
しっかりとした認識を持って，自分自身がそのことについてどう考え，具体的に行動していくかを考えることがまずもって重要だと思います．

表面的なコミュニケーション能力だけを身に着けても中身がなければ何の意味もないと思いますし，自分自身の意見をしっかりと持って主張できるくらいであれば別に英語が流暢である必要は全くないと思いますけどね．
まあ，僕は英語話せませんけど．

HP 拝見しましたが，東京裁判に関するビデオを毎年，見られているとのことですが，僕も見てみたいので，貸してはいただけませんでしょうか．

（2005 年 8 月 22 日　記）